

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



《シリーズ・宣教協議会の提言から その⑤》

マルトウリア

―世界に神の愛を証しすること―

主教 アンデレ 大畑 喜道

皆さんはどのくらい本気で日々神を必要とし、神によって生かされていることに誇りと喜びと自信を持つておられますか。お付き合いで教会に行けばそれでよい、神に召し出されて、クリスマスチャンとして生きるということが、アクセサリーになってはいませんか。日々の営みの中で、キリストを伝えていくことは誰かのやることだ、自分の大切な務めではないと感じてはいませんか。

この世界の中で自信をもって、どんな辛いこと、悲しいことがあったとしてもキリストに出会い、養われていることに喜びをもって伝える重要な役割を自覚すること。洗礼を受け、堅信を受けたときは生まれ変わって歩みだす決心をしたけれども、時間が経つにつれてそれ

が薄れてはいませんか。キリストに出会ったこと、その喜びを証ししていくためには、この世界の流れとは抗うような生活にならなければならぬかもしれません。

マルトウリアということは殉教者であるとすると、この世界に生きるという言葉にも派生して

ていきます。この世から捨てられても、私たちにはそれを超える喜びがある。この世界の様々な間違った動きに対して、本当に小さな声でもよいから勇気をもって生活していくことです。その困難な働きを支えていくのが、教会共同体であり、その営みの中で



行われているみ言葉の確認や、祈りや礼拝や、交わりであり、奉仕です。宣教協議会で確認したことを私たちが共有することは非常に難しい作業です。諦めてはいけません。

教会の使命とは何でしょうか。それは信徒への牧会はもちろんですが、地域社会や世界に対して誠実に向き合っ

て、社会全体への牧会的働きを実践していくこと、預言者的

な働きをこの世界でしていくことです。そのためには、教会は①日々み言葉に聴き、喜びを感じ、伝えることへケリユグマ②この世界で声を出せないような人々の声を聴き、その必要に応じていくこと③ディアコニア④祈ること(マルトウリア)④祈

り、礼拝することを大切にしていこうこと(レイトゥルギア)⑤それを実践していく共同体になること(コイノニア)の5つを基本に据えています。これらが互いに欠けることなく一本の強い綱になっていくことが求められています。絶望と考えるような世界であっても、神は一人一人を大切に、愛してくださいっていることを証しし続ける、そのため

には自分たちが変化することにも必要になっていきます。私たちはすでにあるものを守ろうとするために変化を嫌います。自分はどうのように証しをすることができているかを考え、実践していきましょう。みずから責任を持って恐れずに信仰生活を続けてまいりましょう。

クリスマスのこの時、この世界の人々への真の愛の証しをするために、王でありながら飼葉おけの中に誕生されたイエスのご生涯を黙想しながら、イエスに倣って生きていきましょう。

クリスマスだより 東北の教会から

山形聖ペテロ教会より

司祭 涌井康福

南北に長い東北では、地域によつて少しずつクリスマスの様子も違います。雪の多い地方では礼拝前に猛吹雪となり、どのくらいの人がかかるかと思われ、もむこともあります。それでも多くの信者さんたちが雪だるまのようになりながら「ご降誕おめでとうございます！」と集まってこられて、それだけで大きなプレゼントをいただいたような思いをしたこともあります。また、近隣牧師の集会で「今年のクリスマスはいつですか」と聞かれて「????」となったこともありましたが、これも日本の現実に合わせてやり方なのかな、我々は頭が固すぎるのかな、と少し思い悩んだこともありました。教役者数が少なくなつた現在は、必然的に「今年のクリスマス礼拝はいつにしましょうか」という会話を管理教会でしなければならなくなつてきました。12月25日は「諸人こそりてご降誕を祝いましょう！」という日が来ることを夢見なが



らも、教役者があつたと教会を駆け回るよりは、伝道的にも、牧会的にも良いのかな、などと考えています。しかし、各地の教会、伝道所ではイブの夜には「世に光が来られた！」と、路上でのキャロリングが行われる所もあり、教役者がいない所でも、降誕前夜の礼拝が信者さんたちの手で守られています。少ない人数ですが、地の塩として生かされています。

青森聖アンデレ教会より

信徒 福田優美子

♪森の中にもつ白く見える村の教会♪という歌があります。いつも通う聖アンデレ教会も降誕日(12月25日)のクリスマスに、降誕劇の衣装を着た子どもたちが、神のみ子イエス様のお誕生をお祝いしてお祈りをささげ、聖歌を声高らかに歌い賛美します。まるでタイムスリップしたような時が静かに流れます。

山に茂っている杉の葉を使つて一週間程かけて緑艶(あで)やかなリースを作り、飾つて、燭台のろうそくを灯して、ほのかな灯の中でベツレヘムに生まれたイエス様に心を馳せながらイヴ礼拝をします。ここでは各幼稚園の先生方が1曲ずつオルガンを弾きます。

礼拝の中で青森市内にある栄光学園3園の園児たちが知つている聖歌をイエス様に届けとばかりに歌うと、イエス様の「おさなごを私の所に連れて来

なさい」という声が天から注がれる思いがします。

去年は、定住司祭が病気になり、共に礼拝をささげられませんでした。今年、中山司祭が青森聖アンデレ教会牧師として与えられ、初めてのクリスマスを迎えることが出来ます。

年々天国に召される方がいて、少し淋しくなる教会ですが、クリスマスになると皆の心が華やき、喜びに満たされ、私たちの所に届けられたプレゼントを司祭の説教と共に感謝できる日となります。

また毎年聖マリア幼稚園は市内にあるハンセン病の方々が入所している国立松丘保養園の慰問を続けています。(14～15年間

続いています。)入所者の方々の前で聖劇やクリスマスの歌やダンス等、自分たちの出来ることを精一杯演じてプレゼントしていただきます。(保養園内に松丘聖ミカエル教会があります)



釜石神愛教会より

信徒 高橋仁美

全国の皆様の祈りと応援に支えられ与えられた新しい教会と園舎で、釜石神愛教会のクリスマス礼拝は12月20日(金)の晩に、幼児学園は翌日21日(土)にはじめてのクリスマスを迎えます。



去年は釜石市から仮園舎を借用していただきましたので、教会としてのクリスマス礼拝はできませんでした。新しい教会と園舎が早く建ちますようにと願いました。幼児学園のクリスマス祝会の日程が衆議院選挙投票日に翻弄され、決定に苦慮したことを思い出します。

クリスマス祝会は結局仮園舎のホールで、ぎゅうぎゅう詰めの中で開催しました。職員の発案でクラスの発表毎に入替え制にし、祝会は無事に進められました。年長児の聖劇を始め各クラスの子どもたちも、練習の成果と成長を見せてくれました。

その日の子どもたちの楽しそうな顔を見ていて、例えばどんな場所であっても、

楽しませてあげたいという思いがあれば環境は整うものだ、ということを経験の篤い気持ちで気付かされました。

祝会の終わった後の25日には、子どもたちと職員だけで各クラスの発表を観ます。クリスマスメニューの給食を食べながら、毎年ゆつくりとクリスマスを祝って過ごしています。

能代キリスト教会より

信徒 大高一彦

能代市は、日本海に面し、秋田県の北部に位置し、かつて東洋一と言われた「秋田木材工業株式会社」があります。その創始者、井坂直幹は、1881年（明治14年）東京芝の聖アンデレ教会創設者A・Cシヨウが活躍していた頃、福澤諭吉家に寄宿する学生でした。この会社から教職員が多く出ました。終戦後、植松金蔵司祭司牧時には在籍信徒数252名でした。現在は主に6名で礼拝を守っています。

1949年（昭和24年）、大火により教会など消失しましたが再建され、礼拝堂の音響効果が



良いため、市民合唱団の発表会場として利用されたこともあります。前東京教区主教植田仁太郎師（当時管区事務所総主

事）が1996年頃礼拝奉仕に來能され、イブ礼拝でオルガンの弾き語り調の司式、説教をしてくださいました。

現在は、隔月のレコードコンサートが行なわれています。クリスマスイブには、レコードコンサート後、信徒が日ごろ教会に來ることができない姉妹たちと礼拝を守り、そしてクリスマス礼拝は、秋田市から管理牧師の影山博美司祭が来て聖餐式をし、婦人たちの作る料理に満ち足りて帰途についています。

来年2014年は、宣教100周年記念礼拝を9月20日に計画しています。記念誌の発行を予定しています。1949年の大火で資料が失われ苦慮しています。特に幼稚園や女学院関係の記録が無いことが残念で仕方ありません。

西の平聖パウロミッションより

信徒 遠藤悠美子

2012年12月24日午後6時、クリスマス・イブ礼拝が献げられました。出席者は約20名、信徒家族のほか、女性信徒の夫やご近所の隣人が3人でした。毎年ご近隣にはクリスマス案内をお配りしています。今年も少なくとも来てくださって感謝でした。

すっかり暗くなった礼拝堂内で、一人ひとりペンライトを灯して礼拝、仙台基督教会の牧師補・李賢熙司祭様が司式、信徒5人が聖書朗読しました。集まった

みんなが献げているという感覚での礼拝となりました。

礼拝の後はお楽しみの祝会です。集会所の聖テモテ館はすでに暖かくなっており、いい香りに満ちていました。テーブルの上に並べられた



ピザ、鶏の唐揚げ、マカロニサラダは全部手作りです。前日に女性たちが料理しました。デザートはみかんでした。子どもたちは大喜びでおなか一杯いただきました。こうして、み子イエスキリストの誕生をお祝いしました。翌25日は、仙台基督教会仮礼拝所のパセオビル2階で、降誕日聖餐式・祝会に加わりました。今年も昨年同様にクリスマスをお迎えます。

磯山聖ヨハネ教会より

管理牧師・司祭 長谷川清純

2012年のクリスマスは、年が明けた2013年1月6日の顕現日に祝われました。磯山聖ヨハネ教会仮礼拝所（齋藤研スタジオ）で、主のご降誕を祝う聖餐式が献げられ、私たちは、東方教会の

クリスマスみたいだね、と微笑んだのでした。

この日、1年2ヶ月余りかけて全面修復されたリードオルガンが復活しました。私たちに、東日本大震災直前まで奏樂をされて、津波で亡くなられた三宅實さんが嬉しそうに微笑んでいるような、そんな気がしたものです。この日の奏樂者は加藤晶子さんと鈴木裕子さん（東京教区）のお二人でした。会衆も誘われて、感謝して賛美し、晴れやかに聖歌を歌いました。

礼拝後、場所をセンターしんちに移して、昼食歓談してお祝いしました。そこにはセンターしんちに集う仮設住民や現地ボランティアの方々やスタッフで飾ったクリスマス・ツリーが立てられています。このように、東日本大震災後に主の下に生まれ、築かれてきた、新しい兄弟・姉妹たちとの初めてのクリスマスをお祝いしたのでした。

今年12月28日（土）午前10時30分、降誕日聖餐式・祝会が同じように開かれます。年内に2回目のクリスマス！？という大きなお恵みをいただきます。礼拝堂再建に向けて歩みながら。



司祭と語ろう (特別編)

主 教 五十嵐正司

今回は「司祭と語ろう」の特別企画第二弾として、現在、立教学院のチャブレン長であり、前九州教区主教の五十嵐正司師に、聖職養成委員長の吉松英美さんと広報の渡辺が、新しくなった立教大学のチャペル会館をお訪ねしてお話しを伺った。

尚、紙面の都合上、今号と次号の2回に分けて掲載します。

渡辺 今日は聖職養成委員長の吉松さんも一緒ですので、聖職の養成という観点からお話しを伺いたいと思います。



五十嵐 そうですか、前に黙想会でお話ししましたので重複するかもしれませんが、よろしくお話しします。

渡辺 まずは洗礼を受けられた経緯などからお聞きしたいのですが。

五十嵐 私は大学2年の時に2回

だけ友人に誘われて慶応のBSAに行きました。その時のチャブレンが竹内謙太郎司祭で、そこでお話しを聞いて強く惹かれるものを感じました。ただ、まだ2年生で、他にやりたい事が沢山ありましたのでそれ以上、参加しませんでした。4年生になって就職先が決まっていたからのことです。自分には社会に出るに際して「これだ」という確かな考えが無いことに不安を感じました。それで2年生の時、本物らしいと感じさせてもらったBSAでの学びに本気で参加したいと願い、毎週、行われていた聖書の学びに参加するようになりました。そこで聖書の教えに触れ、よく分かったわけではないのですがこれで生きていきたいと願い、クリスマスの時に洗礼を授けていただきました。そして、次の年に就職したのです。

渡辺 それがどうして神学院に行かれるようになったのですか。

五十嵐 当時、景気が悪くて、就職した会社がリストラをしました。そのとき高校卒で就職した人からリストラされました。また会社が慶応園でしたので、他の大

学出身でリストラされる人が辞めていく際に「君は良いナー」と言われたのです。経営を第一にする会社としては適切な対応だったのでしよう。しかし洗礼を受けて燃えていた私でしたので、会社の価値観に戸惑いました。それで本物だと思ったイエス・キリストについて、もっと学びたいと思い、神学院で学びたいと思ったのです。

吉松 会社を辞めて、ご両親は反対されなかったのですか。

五十嵐 私が神学院に行きたいと話した時、母はいつでもいいから早く帰っておいでと言いました。父はアリの町のマリアのようになるなら良いと言ってくれました。キリスト教のことを何も知らないと思っていた父が、アリの町のマリアを知っていたことに驚きました。ただ、後に知ったのですが、母は失意のあまり次の日に寝込んでしまったようです。がっかりしたのでしょね。

渡辺 お母さんはずっと反対しておられたのですか。

五十嵐 私が司祭に按手され、八王子の教会で働いている時のことです。息子を誰も理解してあげないのは可哀想だと母親は思ったよう

で(後で知ったことなのですが)、洗礼を受けたいと申し出て

きました。

吉松 それが認めてくれたということなんでしょうね。

五十嵐 そうですね。母が洗礼の際、涙したのを見て、私も説教中に泣いてしまうのではないかと不



安になり「今日は、説教できません。」と伝えましたら、教会の人たちは頷いてくださいました。礼拝が終わった時、今日の礼拝は霊に満ちていたと話してくださいました。

渡辺 素晴らしい洗礼式になりましたね。

五十嵐 母は92歳で亡くなりましたが、その前に父を亡くして7年間一人で暮らしていました。不安や辛い思いもあつたのでしよう。亡くなる2年前から「クリスマスチャンになって本当に良かった。」と再三、真顔で話してくれました。最初は息子のために洗礼を受けたのでしようが、最後は母の生きる力となっていたと知って、嬉しく思いました。

吉松 最近は神学院へ行く人が少ないのですが、先生は神学院で何を一番学ばれましたか。

五十嵐 礼拝です。聖書を読み、祈り、聖歌を歌い、黙想する。新鮮な学びでした。

渡辺 神学院は、まず神学を学ぶ場所というイメージがありますが。

五十嵐 わたしは勉強をしていますが復活は理解できませんでした。イエスが本当に復活したのだと信じたのは、司祭になって数年してからです。霊の導きでした。神学院での学びは、後々になって聖霊の導きによって分からせてもらえるのでしよう。神学院で、学ぶ習慣を与えられたことが、今も支えと力となっています。

(以下次号)

一つの暦は一つの文化の存在を表しています。その暦を共有する人びとは、孤立した存在ではなく、一つの命ある共同体に連なる存在であることを意味しています。

クリスマス喜び迎えるということは、キリスト者にとつて、その出来事を個人的に喜び祝うというにとどまらず、共同体としての喜びの輪に加わることができたことを意味しています。一つの文化―生活や言葉の体系、祈りや行動を共有する人々との大切な絆―に結ばれていることを確かめることになるのです。

《聖書を開いて》⑩

教会共同体の祈りの暦

に促されるように、一つの出来事を思い起こすとき、わたしたちは時と所を超えて、クリスマスを彩るあの小さな出来事、その時々その場所に立ち止まります。そして、その視点から、わたしたちが生きる現実の社会に必要な神さまの愛と

憐れみを祈り求めます。

日暮れを感じながら歩むマリアとヨセフ。憩う場所を求める旅の夫婦には、休む場所を得られず、拒絶されることの哀しみを思います(ルカ2・7)。

そして今、さまざまなる理由で、憩うところを見いだせない人、疎外され、また存在を忘れられているように感じている人びとを覚えていられる人びとを覚えたい。

喜び迎えるクリスマス

下条 裕章

暗闇の野に潜む危険に耳を澄ます羊飼いの命の危機と隣り合わせのその仕事、生活の困難やその貧しさを思います(ルカ2・8)。わたしたちは、社会の闇の中にあって不安や悲しみを抱く人、また孤独な人びとを覚えようと思えます。

そして、この闇の中にこそ、神の喜びのおとずれが宣言されます(ルカ2・14)。これを聞いた羊飼いたち、

飼葉桶にある幼子を囲む人びと・被造物すべての姿

に、聖なる家族としての新しい共同体の原点を、新しい教会共同体の暦の始まりを見つけています。それは、富や権力を中心とする在り方とは異なる社会の創造のはじまりをも意味しています。

誕生した御子、神様が備えてくださった思いもよらない解放のしるし、それはあまりにもささやかで、目立つところのない小さな一歩でした。「暗闇に輝く光」(ヨハネ1・5)としてこられた救い主。この世界の光の届かないところにこそ光を灯し、すべての人の心に、そして私たちの心にも光の在り処を知らせます。

わたしたちは、羊飼いや地にある民と共に、天地を結ぶ天使たちと共に、今を生きる仲間と共に、神さまのみ業をほめたたえ、み旨のままに立ち上がり、共にこの地上に、喜びの到来を宣言します。「地には平和、み心に適う人にあれ」、「主は来ませり」と。

「司祭の50話」
新版「原発を考える50話」

西尾 漢 著

岩波ジュニア新書2006年刊

司祭 河野 裕道

この原稿を依頼されたのが、8月の初旬だったせいもあって、まず頭に浮かんだのが、この本だった。未曾有の福島原発事故以前に書かれたこの書物は、原子炉の基本原料であるウランやプルトニウム、その基本的な原理と構造、その基礎となっている放射性物質―α、β、γ、中性子、線の性質の説明から始まっている点で、信頼のおけるものである。また、その発電メカニズムには、概ね2種類あってそれぞれに危険性をはらんでいることが指摘されていることから説き始められている。放射性物質の危険性は、原子炉事故による場合のみならず、核分裂物質が地下から採掘され、精錬されて燃やされ、蒸気によってタービンが回されて発電、そしてご存知



のように使用後の廃棄物になった後の処理についても延々と続くことの中にある。以上のような、原発の原理を初心者でもわかるように短く50の単元にまとめてくれている。それに加えて、電力会社や政治機構―安全保障委員?、日本原子力研究機構などの安全を確保しようとする機構の脆弱性と経済優先性の落とし穴が綿々と指摘されている。外国の事例との比較や国内の数十年前に亘る歴史を踏まえながらの50話は読みごたえがある。我々自身が責任ある判断をすることが求められている。基本的な事柄を身に着ける意味で、また学部で放射線を学んだ者としてもお薦めしたい。

最近、市民社会の成熟度という文言を誌上で目にする。多くの自治体の責任者だけでなく、一般市民も原発反対を表明しているが、今一つ腰が引ける。正確な情報が得られていないからではないだろうか?

生活の中の祈り

司祭 成 成鍾

・祈りの目的は何
祈りや黙想は、悟りを得るための行いではない。慰めや癒しを頂くため、或いは幻を見るための行いでもない。それらは神様との交わりによる恵みとして、

様は私たちを離れることはないが、私たちは神様のことをしばしば忘れ、また無視してしまうからである。それゆえ神様に近づくためには、先ずそういう古い習慣から抜け出さなくてはならない。ところが、それは一気に出来ることではないため、一連の過程を踏み進むことが求められる。その過程自体が祈りであるが、対話 (communication) ・交わり (communion) ・一致 (union) というのが過程に関する一つの例として挙げられる。

・多様なやり方

教会の歴史の中、祈りと黙想の多様なパターンが伝承されている。対話・交わり・一致が祈りの過程であるがゆえに、それに沿ったたくさんさんのやり方がある。例えば、聖書や祈祷書、また祈祷文などの言葉を用いて行うことも、かえって沈黙の中に静まることによるやり方もある。そして五感、またイメージや想像力を生かしながら行う方法もある半面、そういったものを使わず頭から無くしながら行う方法もある。場合によってイ

・過程としての祈り

祈りや黙想をする目的が神様そのものだとしても、完全に神様にまでたどり着くのはそう簡単なことではない。神

コンやロザリオなどの道具を使うこともある。教会に受け継がれている神様の神祕に近づいための多様なやり方があるが、その中、特定なことだけが悪いというはない。自分に合うやり方を見つけ、深めていくことが大事である。

・生活の中の祈り

祈りや黙想は、神様と生きるために本来の自分の姿を取り戻す新たな形成の過程だと言える。つまり、単なる情報ではなく、変化を求める霊的な営みである。それゆえ、意

図的な行いとして生活の中で練習が必要とされる。まるで運動選手が体を鍛えるように魂の筋肉を鍛えることである。練習を重ねるとそれが習慣になり、いざれ習慣は身に染み込むようになる。つまり御心が受肉化されることによって、自分を通して主が生きるようになるのである。そういう過程を通して、祈ることと行動することを分けてしまふ、二元論に基づいた古い理解を克服するようになる。

(渋谷谷聖ミカエル教会牧師)



9月23日に行われた2013フェスティバルの閉会礼拝で紹介された「next・ten・tokyo」のロゴです。すでに各教会・礼拝堂にロゴのデータを送りましたので週報、教会報などでご活用ください。このロゴは今後、教区においてさまざまな場面で活用される予定です。10年後に迎える100周年に目を向けて、心を新たにしてい共に歩みを進めていきましょう。

(宣教主事 司祭 卓 志雄)

掲載予告
原発問題についてのQ&A

日本聖公会は2012年の総会で「原発のない世界を求めて―原子力発電と放射能に対する日本聖公会の立場」という声明を決議しています。これは政治的な立場からではなく、神様によって造られ、与えられた「いのち」を守ることは教会に与えられた責務であるとの立場からでした。

それを受けて、本誌では来年から1年間、管区の「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」が作成した問答集を掲載いたします。

勿論、原発についてはいろいろな立場の方がいます。なぜ教会が原発問題を考えなければいけないのかと思う方もいるでしょう。そのことも含め現状を知り、すべての人に関わるこの問題について、みんなで一緒に学び、考え、議論を深めていきたいと思えます。ぜひ、お読みいただいでご意見をお聞かせください。

(広報委員会)

ようこそ立教学院諸聖徒礼拝堂へ



立教池袋キャンパスのシンボルである時計台の横に、立教の魂のよりどころである立教学院諸聖徒礼拝堂（チャペル）があります。チャペルの一日は、毎朝7時の聖餐式にはじまります。

授業のある日は、8時30分から始業の祈り、それに続き立教学院の礼拝堂として各学校の様々な礼拝が奉げられます。主日は、東京教区の礼拝堂の顔を出し、9時からの日曜学校さゆり会の子供礼拝に続き、10時から主日聖餐式が始まります。主日聖餐式は、五十嵐正司チャプレンをはじめとする立教学院チャプレンの司式・説教、学生キリスト教団体のアコライトギルド、オーガニスト・ギルド、聖歌隊、ハンドベルクワイアのご奉仕、それに主日会衆が集います。会衆席には、立教や他校の学生・生徒・児童、立教学院の教職員、結婚オリエンテーションにいらしたカップル、一般会衆と様々な方がいらっしや

います。また、資格試験や予備校の模試、学校見学にいらした方も礼拝出席はもちろんのこと、礼拝に支障がない限り見学も受け入れ、全ての方に開かれたチャペルを実践しています。



今年は、待望の素晴らしい新チャペル会館が与えられ、チャペルの改修工事（照明空調、音響等）、新パイプオルガンの設置が終了し、今まさに、新たな立教のキリス

ト教活動が育まれています。

チャペルには、教籍を置いた信徒がおり、現在受聖餐者は170名強で、毎主日に集える信徒が少ないとか、現在非受聖餐者が多いと言った悩みもあります。オルターギルドのご婦人たちのご奉仕、会衆としての震災支援の取り組み等を行っています。そして、教会委員会に相当する主日会衆委員会は、信徒から選ばれた会衆委員に加え、10ある学生キリスト教団体（GFS、BSA、ローバース、アジア寺子屋等）の学生達と一緒に、チャペルの主日活動を議論しています。キリスト教団体の学生は、今はノンクリスチャンがほとんどですが、その中で彼らが神様に向き合っている姿を見るにつけ、学ばされる日々を過しています。

このようにパリッシュ・チャーチとは趣が異なりますが、立教ならではの皆が調和して奉げる聖餐式に、是非一度、足をお運びください。

（中井 修）

《信徒リレーエッセイ》

神様からのプレゼント

聖ルカ礼拝堂

佐藤 蘭子

クリスマスというと、看護学生の時キヤロリングで病棟を回り、病室で患者さんや家族がキラキラとした美しい表情で私たちを迎え入れてくれて、ああ、こういう人たちのためにイエス様は来て下さったのだ、と胸がいっぱいになったことを思い出します。

聖ルカ礼拝堂には毎週のように患者さんが礼拝に参加しています。避けられない困難が襲ってきた時に救いを求める人の声を、たとえ神様を信じていなくても苦しんでいる人の声を、病と死が身近にある場所で働く者が持つ思いを、イエス様は確かに聞いて下さっていると感ずることがあります。路頭に迷う私たちを愛する神様が与えて下さったイエス様こそ、クリスマスの一番大きなプレゼント。今年も感謝して受け取りたいと思います。

このクリスマスの喜びを、一人でも多くの人と分かち合うことができますように。

メリークリスマス！

